Publisher's Review
パブリッシャーズ・レビュー
●東京大学出版会・白水社・みすず書房のPR紙●

msz みすず書房の本棚
［無料送付］
No. 30　2019 春　（表示価格は税別です）
113-0033 東京都文京区本郷2-20-7　tel. 03-3814-0131　www.msz.co.jp

壁にぶつかりながら

――西見奈子《いかにして日本の精神分析は始まったか》を読む

藤山直樹

私が精神分析家になる前に先達たちから教えられた日本の精神分析の歴史は、ほとんどこの本の第五章に登場する古澤平作から始まっていた。現在日本の精神分析コミュニティを形成する日本精神分析協会と日本精神分析学会というふたつの団体が、一九五〇年代に古澤を中心に誕生したのだから、私たちがその視点でしかものを見ることができないのも仕方ないことだっただろう。

しかし、日本の精神分析の歴史はそれよりずっと以前から始まっていた。この本はその事実を綿密な資料の検討のもとに明瞭にしている。今後日本の精神分析の歴史について語られることがあれば、この本から出発せざるをえない。膨大な資料を掘り起こし、いままで語られてこなかった事実をつなぎ合わせて、日本の精神分析運動の歴史をかつてないほどにまとまった形で呈示した。この本はそういった画期的な著作である。

さて、精神分析という実践と理論の体系はこの国に根を下ろしていない。二十世紀初頭にウィーンでフロイトによって生み出され、欧米のほとんどの国の都市で市民生活の一部になっている精神分析の実践は、日本では根づくことはなかった。いまの日本で、自分を訓練された精神分析家だと考えて実践している人間は五十人に満たない。ロンドンの街に五百人程度、フランスに五千人程度、アメリカに三千人以上活動しているのに比べると微々たる数である。そして、日本でときおり知識人たちによって語られる精神分析はおおかた理論としての精神分析であり、実践の実感を欠いている。

なぜ日本に精神分析という実践が根づかなかったのだろう。当然そういう疑問が浮かぶ。私を含め日本の精神分析家や精神分析的な臨床家たちは、つねに毎日この問題と格闘している。人間の本質の部分に強力な衝撃を与えて破局的な変化をもたらし、不毛と反復からの離脱、成長と発展の可能性に導くこの実践の力を、精神分析家は自分の受けた訓練のための精神分析や日々の実践を通して確信している。にもかかわらず、日本の市民社会は精神分析を受け入れてこなかった。その壁にぶつかっている感覚が私たちには絶えずある。

この本はそうした問題を考える前提としての歴史的事実を探求しようとしていると言えるだろう。私の読む限り、西は歴史家としてでなく、あくまでも精神分析の実践家、当事者の視点に立ってこの本を書いている。というよりも、そうした実践家としての危機意識がなければ、これほどの資料をまとめてひとつの著作にする動機づけは生まれなかっただろう。彼女は精神分析という文化が日本にどのように流入してどのように推移してきたのか、それを単に歴史的事実として描き出し考察するのではなく、前述の壁にぶつかっているひとりとして歴史から学ぶためにこの仕事にとりかかった。

西はもともと医師ではなく、心理学者である。そのせいかもしれないが、この本では、非医師の分析的治療者であった矢部八重吉と大槻憲二についての章がとりわけいきいきとしているように思う。矢部は国際分析学会IPAから資格を与えられた日本最初の精神分析家である。米国留学で心理学を学んだ彼が、なぜか大学アカデミズムに居場所を見いだせず、鉄道省で実験心理学者としての道を進み、その果てに心理学を「科学の仲間入り」させる力をもつものとして精神分析を発見するに至った。ロンドンでジョーンズに訓練を受け、クラインと親交をもち、ウィーンでフロイトに面会して分析家資格を得て帰国して、国際精神分析学会日本支部を立ち上げた。この人物の実践や教育者としてのありようを西が評価していることはよく読みとれる。一方、大槻については、「日本の非医師分析家のパイオニア」として持ち上げる論調が国際的にすでに存在しているが、著者は大槻が訓練を受けているかどうか疑問であるだけでなく、その実践が精神分析的実質を欠いているとして、その論調に反論している。

精神分析的実質を持つ実践とは、患者と分析者のあいだの交流の独特の性質を前提とした実践である。こうした精神分析的実質についての敏感さはこの著作を貫くもので、それがこの本を単なる歴史書以上のものにしている。西はこの視点から歴史的事実を再解釈する。ここにこの著作のユニークさがある。たとえば、医師のパイオニアのひとりである丸井清泰の実践が、従来日本の精神分析コミュニティで精神分析の実質を欠いているかのように言われていたが、綿密な資料の検討から必ずしもそうでなく、精神分析的実質を帯びているものだ、という主張もしている。

この本は日本に精神分析を根付かせようとして生きている私のような人間には、いろいろなことを考えさせる刺激的な著作である。たとえば、矢部が古澤と戦中に語り合い、支え合っていたらどうなっていたのだろう、という想像は、分析家どうしが対話することが精神分析の生存について決定的に重要だという考えを導く。思えば精神分析も、精神分析家と患者のカップルだけで成立しているものではない。分析家が誰かと語り、自らの体験を形とする営みをどうしても必要とするのである。

一方、精神分析について当事者でない読者がこの本を読むことが面白いのかどうか。私にはわからない。私は当事者であるので、どうしてもそのような読み方しかできない。おそらく、ひとつの文化をなんとか身に着け、この世に根づかせようとした多くの人間の営みを、まさにその営みのただなかにある著者が書いたこの本は、その外にいる人にとっても面白いのではないか、と考えるだけである。

（ふじやま・なおき　精神分析家）

暗闇に光を当てる

西見奈子

《いかにして日本の精神分析は始まったか

草創期の５人の男と患者たち》

日本にフロイト理論を初めて紹介したのは、一九〇二年、「公衆医事」誌で「性欲雑説」を連載していた森鷗外であったといわれている。精神分析は、明治から大正期に人間の心を解明する最新の科学として紹介され始めると、心の様を表現する文学者や芸術家たちの関心をも惹くようになる。そのなかで、治療としての精神分析に惹かれ、フロイトに会うことを切望し、精神分析家となって精神分析運動へと傾倒していった男たちがいた。――鉄道省に勤める在野の心理学者で、イギリスで訓練を受けた後、日本初の精神分析家となる矢部八重吉。欧米留学後、東北大学医学部精神病学教室の門弟を中心に精神分析研究のグループを形成し、今日の精神分析コミュニティの前身をつくった丸井清泰。東京精神分析研究所を創設し、『フロイド精神分析学全集』（春陽堂）の翻訳、雑誌「精神分析」創刊などの出版活動に注力した大槻憲二。大正期、創作の行き詰まりから催眠療法にのめりこみ（当時、催眠術はブームだった）、フロイトやユングを次々と紹介してゆく雑誌「変態心理」での執筆活動から精神分析を世間に知らしめた、小説家で精神療法家の中村古峡。「阿闍世コンプレックス」の論文とともに「不二山」の絵をフロイトに持参し（それはフロイトの待合室に飾られた）、戦後、日本精神分析学会を創設した古澤平作。

「不二山」の絵

五人の男と患者たちが残した著作、記録や写真などの関係資料をできうる限り調査し、日本の精神分析の歴史を、人間模様を織り込みながら丹念に紐解いていく。それはまるで、なぜ精神分析なのか、を追う推理小説のようだ。臨床家である著者が精神分析の歴史の暗闇に初めて光を当てる、画期的な力作。［精神医学・医学史］【三月下旬刊】

（四六判・256頁・予三二〇〇円）

20世紀暴力の起源

ローベルト・ゲルヴァルト
《敗北者たち
第一次世界大戦はなぜ終わり損ねたのか 1917–1923》
小原 淳 訳

第一次世界大戦はいつ終わったのか？ 一九一八年十一月だ。だが、戦争の敗北者たちにとって、それはまさに暴力の始まりだった。

ハプスブルク帝国、オスマン帝国、ロシア帝国、ドイツ帝国の崩壊、革命と反革命、再編された国家間の紛争、中東問題の発生。四〇〇万を超える人々が戦後の武力紛争によって死亡し、大量の難民が発生した。第一次世界大戦後のヨーロッパは「地球上で最も暴力的な場所」になった。

第一次世界大戦とは専制主義に対する民主主義の勝利であり、崩壊した帝国は時代錯誤な〝民族の牢獄〟であったという従来の見方は、この事態を見過ごしてきた。だが、勝者の視点から離れて敗北者たちに光を当ててみれば、第二次世界大戦へと続く暴力のサイクルがみえてくる。

第一次世界大戦は国家間の戦争であったが、戦後は連鎖的な紛争へと変容した。そしてイデオロギー闘争と民族差別は敵を殲滅せんとするジェノサイドの論理を生み出したのである。一九一七年から二三年のヨーロッパは、二〇世紀を席捲した暴力を理解する上で決定的な意味を持つ。

確かな実証性で無数の紛争を一望のもとに描き出す本書は、第一次世界大戦の本当の意味を問い、新たな歴史像を見せてくれる。［現代史］（四六判・568頁・五二〇〇円）

▽第一次世界大戦はいかにして始まったか。**クラーク『夢遊病者たち』**小原訳（全2巻①四六〇〇円②五二〇〇円）

画期的な脳科学書、待望の邦訳

ジェルジ・ブザーキ
渡部喬光監訳　谷垣暁美訳
《脳のリズム》

「脳は予測装置であり、その予測能力は、絶え間なく生成しているリズムから生じる。」二〇〇六年に刊行された原著は、かつて「ノイズ」にすぎないとされていた現象への見方を一八〇度転回させたといわれる。待望の邦訳。

脳内のリズム現象は私たちの認知機能の中核を担っている。脳の中では振動子としてのニューロンが集団的に同期しつつ、f分の1揺らぎ、時間窓によるスイッチ、確率共振といった特性を利用しながら、思考や記憶などの機能を創発するシンフォニーを奏でているのだ。著者は本書を初歩から説き起しているが、読み終わるころには振動ダイナミクスと認知機能の関連が驚くほど具体的に見えてくる。

たとえば後半の第11章では場所細胞のスパイクという細胞レベルの現象と、θサイクルというネットワークの振動現象によって、動物が周囲の空間を把握し、記憶しながら移動できる仕組みを機械論的に説明しきっており、圧巻だ。まさに脳の見方を変えた一冊。［生物学］【四月中旬刊】（A5判496頁・予五二〇〇円）

マイクロバイオータからCRISPR（クリスパー）へ

パスカル・コサール
矢倉英隆訳
《これからの微生物学》

細菌＝病原菌という図式が誤りで、人体には多くの細菌が常在しており、それがヒトの健康に欠かせないという認識は近年一気に広まった。

しかし細菌の驚くべき生態はそれだけではない。細菌は集団で生き仲間同士で会話を交わす。自分たちの密度を把握し、勝算が見込める数があるときにのみ病原性を発揮する。細菌同士で殺しあうこともある。ヒトだけでなく多くの哺乳類、魚類、昆虫、植物と共生関係を結ぶ。さらにゲノム編集技術CRISPR Cas9は、細菌がウイルスに対して発揮する免疫の研究から生まれた。「21世紀は生物学の世紀になるだろうと言われた。それは間違いなく微生物学の世紀である」。微生物学の最先端を世界的研究者が概説した濃縮の一冊。用語解説付き。［微生物］【三月下旬刊】（四六判240頁・予三二〇〇円）

▽**クリルスキー『免疫の科学論』**矢倉訳（四八〇〇円）

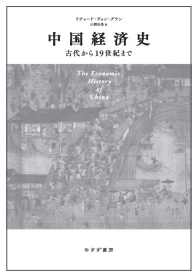
三〇〇〇年のダイナミズム

リチャード・フォン・グラン
山岡由美訳
《中国経済史　古代から19世紀まで》

日本、欧米、中国の研究成果を総合し、青銅器時代から清末までを俯瞰する通史。

「［本書は］青銅器時代から20世紀までのおよそ30世紀を扱い、研究の空白を埋めるという試みに挑戦しようと思う。…本書では対立する議論間の隔たりを埋めることをめざし、バランスと客観性の獲得に気を配った」「わたしの目標は何千年にも及ぶ中国経済の推移について、入手可能な最良の研究成果に基づき、さまざまな議論を総合しつつ筋道立てて語ることにある」「本研究では第一に、歴史や経済に関する単線的な発展段階論にはどんなものであれ賛同しない。第二に、原理主義的な新古典派経済学、とくに市場こそが経済発展や富の創造の動因であるという考えを否定する。前近代についてもそうだが、近代的経済成長はたいていの場合、市場の拡大によって実現するのではなく、新しい知識や技術が育んだイノベーションによって可能になる」（「序」より）

量的データとナラティブの融合が、新たな中国史のイメージを提示する画期的業績。「中国の政治経済を形作ってきた力についての必須の参照書籍になるだろう」マデライン・ゼリン（コロンビア大学）。［経済・歴史］【三月下旬刊】（A5判・432頁・八二〇〇円）



改革の旗手が描く未来

C・チェインバーズ
大塚紳一郎訳
《心理学の7つの大罪
真の科学であるために私たちがすべきこと》

「いまのままなら百年以内に、あるいはもっと早く、心理学は古臭い学問の一つと見なされるかもしれない。ちょうど私たちがいま錬金術や骨相学を見るのと同じように」

STAP細胞問題で衆目を集めたデータの捏造・改ざんによる不正行為は、心理学にとってもけっして対岸の火事ではない。顕著な有意差のある研究結果への偏重、実験データの私物化、不正行為への脆さ、論文のでたらめな評価尺度……。著者は自らの研究者生活、専門誌の編集委員経験を通じて見えてきた、心理学の研究文化に根づく「7つの大罪」を暴き出す。

心理学が透明性と再現可能性を高め、真の科学であるためにはいま何をすべきか？ 改革の旗手が変革への青写真を提示する、警鐘の書にして救済の書。［心理学概論・研究倫理］【四月上旬刊】（四六判392頁・予四二〇〇円）

本書「第7の罪　心理学はでたらめな数字で評価を行っている」扉絵

絶滅収容所の渦中から届いた言葉

チェア／ウィリアムズ
二階宗人訳
《アウシュヴィッツの巻物　証言資料》

ナチの絶滅収容所内に設置されたガス室は、移送されてきたユダヤ人の中から選別された囚人「ゾンダーコマンド」によって稼動していた。遺体の処理や清掃、焼却など、「地獄」の作業を担わされた彼らが書き残し、火葬場の地中に埋めた手記や手紙が戦後に発掘され、「アウシュヴィッツの巻物」と呼ばれている。ガス室の写真も撮影されていた。

ゾンダーコマンドたちは目撃した事柄をぎりぎりまで追求し、記述していた。ゲットーの歴史、家族への言葉、言葉を絶する経験。外部や後世の「他者」とつながろうとした意志――これはホロコーストが「表象不可能」と評されることへの根源的な反証である。「巻物」を巡る初の包括的考察の書。［歴史・思想］【四月下旬刊】（A5判384頁・予六〇〇〇円）

消滅した町、悪も善も限界を超えた

エヴァ・ホフマン
小原雅俊訳
《シュテットル
ポーランド・ユダヤ人の世界》

東欧のユダヤ人が住んでいたシュテットル（イディッシュ語で「小さな町」）は、ホロコーストによって消滅した。

かつて人口の半分以上がユダヤ人だったポーランドの町ブランスクで、消えたユダヤ人の痕跡に魅せられて墓碑や文書を解読、墓地を復原した若い郷土史家がいる。ホロコースト第二世代として〈記憶と和解〉を考え続ける著者が、彼と共に小さな町から見えてくるポーランド・ユダヤ人の壮烈な歴史を追った。

農民でカトリックのポーランド人と職人や商人のユダヤ人は共存してきたのに、なぜここでナチズムが吹き荒れたのか。人間の悪も善も寛容も、限界を超える時がある。この葛藤は世界の民族問題の雛形のようだ。［世界史・民族］（四六判・368頁・五四〇〇円）

ジョージ・アカロフ（ノーベル経済学賞）推薦

J・N・ミュラー
松本裕訳
《測りすぎ　なぜパフォーマンス評価は失敗するのか？》

業績評価失敗の根本原因を分析。「測定基準の改竄はあらゆる分野で起きている。そして改竄は、報酬や懲罰の根拠に実績基準を使うと必然的に起こる問題のひとつでしかない。世の中には、測定できるものがある。測定するに値するものもある。だが測定できるものが必ずしも測定に値するものだとは限らない。測定のコストは、そのメリットよりも大きくなってしまうかもしれない。測定されるものは、実際に知りたいこととはなんの関係もないかもしれない。あるいは、本当に注力するべきことから労力を奪ってしまうかもしれない。そして測定は、ゆがんだ知識を提供するかもしれない――確実に見えるが、実際には不正な知識を」。［経済］【四月下旬刊】（四六判224頁・予三〇〇〇円）

▽**ホフマン『記憶を和解のために』**早川訳（四五〇〇円）

みすず書房新刊

（2018・11～2019・3）
東京・文京・本郷2
℡〇三・三八一四・〇三三
（価格は税別です）

〈効果的な利他主義〉宣言！
慈善活動への科学的アプローチ
マックスキル　慈善活動のパフォーマンスはどうやったら測れるのか？　証拠ベースの新世代の社会貢献学。**千葉敏生訳**　三〇〇〇円

子ども文庫の100年
子どもと本をつなぐ人びと
高橋樹一郎　子どもが本に親しむ居場所となった「子ども文庫」。明治から現代まで、その全体像を見せるはじめての本。三〇〇〇円

他者の影　ジェンダーの戦争はなぜ終わらないのか
ベンジャミン　フロイトの女性論とその批判を再検証。精神分析におけるジェンダーの戦争の終結への序章。**北村婦美訳**　四五〇〇円

中枢神経系　中世・近代篇
構造と機能　理論と学説の批判的歴史
スーリィ　脳と神経と身体と心を知るために。ガレノス以後から十九世紀脳局在説までを描く。全2巻完結。**萬年・新谷訳**　二〇〇〇〇円

ガザに地下鉄が走る日
岡真理　封鎖が続くパレスチナ・ガザ地区。人間の尊厳を奪おうとする占領と、なお人間的に生きる人びとの声を伝える。三二〇〇円

タコの心身問題
頭足類から考える意識の起源
ゴドフリー＝スミス　進化はまったく違う経路で心を二度つくった。全身が頭脳でもある頭足類の「心」とは？　**夏目大訳**　三〇〇〇円

鼓動が止まるとき　1万2000回、心臓を救うことをあきらめなかった外科医
ウェスタビー　人工心臓手術のパイオニアとなった破天荒な心臓外科医による自伝的エッセイ！　**小田嶋訳　勝間田監修**　三〇〇〇円

ナイチンゲール　神話と真実　新版
スモール　クリミアの病院の高い死亡率の原因を追う中で直面した真実。自らの過誤を贖うため選んだ道とは。**田中京子訳**　三六〇〇円

ウイルスの意味論
生命の定義を超えた存在
山内一也　その生と死は生物とはどこかずれている。分解された親から複製され破壊後も蘇る。常識を問う書。［好評重版］二八〇〇円

ホロコーストとアメリカ
ユダヤ人組織の支援活動と政府の難民政策
丸山直起　ナチスドイツを逃れて自由の国に入ろうとするユダヤ移民に、アメリカはどう対応したか。真実の諸相を描く。四六〇〇円

バウハウスの人々　回想と告白
ノイマン編　全人的な教育により、優れた造形家を育てた伝説の学校の日々を物語る五四人の証言集。**向井・相沢・山下訳**　八二〇〇円

日本の精神鑑定　増補新版
重要事件25の鑑定書と解説　1936–1994
阿部定事件から「連続射殺魔」少年事件、深川の通り魔事件まで（1936–94）。法曹・精神医学・報道その他必須の資料。一八〇〇〇円

第一印象の科学
なぜヒトは顔に惑わされてしまうのか？
トドロフ　人の顔バイアスを数学的モデルにより分析。認知研究の最先端「すばらしい本だ」カーネマン。**中里訳　作田監修**　三八〇〇円

現代物理学における決定論と非決定論　改訳新版
カッシーラー　量子力学的世界を哲学的に基礎付け、科学と哲学を架橋。カッシーラー哲学全要素の結接点。**山本義隆訳**　六〇〇〇円

アントフィナンシャル
1匹のアリがつくる新金融エコシステム
廉薇他　「アリペイ」「芝麻信用」で中国のキャッシュレス化を牽引する世界的フィンテック企業の全貌を解明。**永井麻生子訳**　三二〇〇円

コレージュ・ド・フランス講義草稿　1959–1961
メルロ＝ポンティ　遺稿となった講義草稿を編集して一書となす。哲学者晩年の思索を伝える待望作。**松葉・廣瀬・加國訳**　七八〇〇円

共食いの島　スターリンの知られざるグラーグ
ヴェルト　シベリアへの「強制移送・遺棄」の実態がはじめて明らかに。発端は、オビ川のナジノ島の悲劇。**根岸隆夫訳**　三五〇〇円

食べたくなる本
三浦哲哉　料理本を批評的に読む。「食べること」のすべてを愛し直そうとする。まったく新しい料理哲学の誕生（千葉雅也）二七〇〇円

ヴェネツィアの石
ラスキン　精緻かつ雄大につづられた「水の都」の建築史、生誕二〇〇年におくる主著最適のヴァージョン。**井上義夫編訳**　六〇〇〇円

中井久夫集 9　2005–2007
日本社会における外傷性ストレス
圧巻の「戦争と平和についての観察」はじめ「樹をみつめて」「絵画療法と私の今」「虹の色と精神疾患分類のこと」など。三六〇〇円

戦中と戦後の間　1936–1957　［新装版］
丸山真男　「政治学における国家の概念」から「ノーマンを悼む」まで全六一篇。激動の時代の中、思想史家からの応答。六〇〇〇円

ベトナムの泥沼から　［新装版］
ハルバースタム　アメリカが挫折を強いられた、ベトナム戦争の実態を透徹した目で描く。付・新解説（藤本博）。**泉・林訳**　四二〇〇円

弁造さんの「生きること」心揺さぶる写文集

奥山淳志

《庭とエスキース》

写真（上・右）奥山淳志

写真家である著者は、北海道の新十津川の丸太小屋に暮らす「弁造さん」の姿を14年にわたり撮影しつづけた。弁造さんは、がむしゃらに経済発展を続ける戦後の日本社会に疑問符を投げかけるかたちで自給自足の生活を営み、独自の美意識にしたがって庭をつくり上げていた。自力で掘った池、「自給自足は楽しくなければならない」と植えた果樹や野菜、風景に季節の色彩をもたらす木々や草花に彩られた、豊かな庭。知恵とユーモアにあふれる弁造さんと弁造さんの庭に心を奪われ、季節が変わるごとに丸太小屋を訪ねるうち、著者は、弁造さんにもう一つの姿があることを知る。十畳ほどの小屋の中央に置かれたイーゼルに向かって、弁造さんは筆を動かし始めるのだ。「社会的なメッセージとは全く無縁なものとして、弁造さんは絵を描いていた。（…）僕は何かに導かれるように、弁造さん、庭、絵という三つを見つめることになった」。生涯独身だった弁造さんはなぜ庭に木を植えつづけたのか、そしてなぜ女性たちの絵を描きつづけたのか――。弁造さんの死後、時が経つほどに鮮やかさをます〝あの日のこと〟。弁造さんの「生きること」を想い、濃やかな筆致で綴られた寓話のような24篇の文章と40点の写真。昨年、写真集『弁造 Benzo』とその展覧会で話題を呼んだ写真家による心揺さぶる写文集。［写真・エッセイ］【四月中旬刊】（A5変型並製328頁・予三二〇〇円）

書評コラム

『みすず』一・二月合併号「読書アンケート」特集より

毎年この特集を組み、ご好評を戴いています。本年140名のご回答中、小社刊行書への評を一部ご紹介（敬称略、順不同）▽**ヘラー＝ローゼン『エコラリアス』**関口涼子訳　完結した機械的システムとしてのみ言語を捉える浅薄な言語観を優雅に斥ける（田中裕介）決して聞こえず、文字にはならない谺を、静かに沁み入るように聞かせてくれる（岡崎宏樹）（他に岡田温司、田中純、堀潤之）▽**梁鴻『中国はここにある』**鈴木将久他訳　社会学の聞き取りの手法を使って書いていながら、一つの村の大河小説を書き上げたような濃密な文学性（ブレイディみかこ）（他に阿部日奈子、藤井省三）▽**小堀鷗一郎『死を生きた人びと』**終末期を生きる人々の三十通りの事例に短篇小説のネタのようなおもしろさがある（山田稔）（他に江口重幸）▽**ナイツェル／ヴェルツァー『兵士というもの』**小野寺拓也訳　誰が軍隊文化に適応し、誰が適応しないのか、その差は何なのかが、知りたい（上野千鶴子）（他に石原千秋）▽**チョン・スチャン『羞恥』**斎藤真理子訳　近くて遠すぎる両国の人々の心を、少しでも知るために（斎藤貴男）（他に三島憲一）▽**辛島デイヴィッド『Haruki Murakami を読んでいるときに我々が読んでいる者たち』**まずはニューヨークを押さえなければダメなんだとよく分かった（宮下志朗）（他に服部文祥）▽**フランクリン『「蓋然性」の探求』**南條郁子訳（上村忠男、三中信宏）▽**クリルスキー『免疫の科学論』**矢倉英隆訳（津田篤太郎）▽**アガンベン『哲学とはなにか』**上村忠男訳（前田耕作）▽**アガンベン『身体の使用』**上村忠男訳（國分功一郎）▽**グリーン『ジェネリック』**野中香方子訳（宮地尚子）▽**アフロン／アフロン『メトロポリタン歌劇場』**佐藤宏子訳（新田啓子）▽**坂口恭平『建設現場』**（姜信子）▽**明田川融『日米地位協定』**（小沼通二）▽**シルヴェスター『ジャコメッティ　彫刻と絵画』**武田昭彦訳（酒井忠康）▽**ヘレーラ『石を聴く』**▽**イサム・ノグチ　エッセイ』**ともに北代美和子訳（野谷文昭）……ほか、ぜひ小誌をごらん下さい。

近傍のコミュニズム

松本潤一郎《ドゥルーズとマルクス》

『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』はマルクスに、マルクス主義に完璧に貫かれた作品です」（ジル・ドゥルーズ）

「〈資本と労働が出会ったのであれば〉という条件法のカタパルトなくして産業資本主義は現実に成立しなかった。両者の結合は必然ではないし、因果関係にもない。だとすれば〈資本と労働が出会わなかったのであれば〉をカタパルトとして描きだされる軌道を私たちには構想することができるし、その構想を実現することもできるのではないか」。資本主義を歴史へと帰還させ、物語を終わらせること。ドゥルーズ哲学・現代思想と「歴史家」マルクスとの遭遇から垣間見るコミュニズムという近傍ゾーン。［現代思想］（四六判・288頁・二七〇〇円）

アリストテレス以来

中村隆文《リベラリズムの系譜学　法の支配と民主主義は「自由」に何をもたらすか》

われわれ人間は常に「自由」を求め、自らの人生の可能性を追及したり、幸福を実現するために、二千年以上にわたって「リベラリズム」という運動を続けてきた。

本書はさまざまな思想家たち、とりわけ法哲学者・政治哲学者たちの問題提起と解決の繰り返しの歴史を概観し、改良が繰り返される社会システムの中でわれわれが享受してきた「自由」の種類を精査・分析してゆく。

民主主義という駆動系システムと法の支配という制御系システム。その二つを柱とする望ましい社会システムとは何か――野心的「リベラリズム」入門。［政治学・リベラリズム］【四月中旬刊】（四六判288頁・予三八〇〇円）

▽利己的なわれわれはなぜ協調できるのか。**中村隆文『不合理性の哲学』**（三八〇〇円）▽**ガタリ『リトルネロ』**宇野・松本訳（四八〇〇円）**ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』**國分・千葉訳（五八〇〇円）

若手研究者の快挙

松尾梨沙《ショパンの詩学　ピアノ曲《バラード》という詩の誕生》

意外にもショパンは多くの歌曲を書いている。しかし生前に未刊行だったこともあり評価は低い。一方で彼には、文学「バラード」と共通する作品が四つある。ピアノ独奏曲にバラードの語を用いたのはショパンが最初だが、その意図は謎であり続けてきた。

本書はその謎を解き作曲家像を一新した快挙。まず歌曲群の完成度の高さを示し、その発見を梃子に《バラード》が壮大な芸術的営みであることを明らかにしてゆくという世界的にも類のない手法をとる。ショパンは感傷的な音楽の作者という意味で「ピアノの詩人」と呼ばれてきたが、本当は全く別の意味でそう呼ばれるべきなのではないか。ファンも演奏家も研究者も、今後避けて通れない一冊。

［クラシック音楽］（A5判・408頁・四六〇〇円）

ブラジルの保護施設を起点に

ジョアオ・ビール

《ヴィータ　遺棄された者たちの生》

桑島薫・水野友美子訳

ブラジル南部の都市ポルト・アレグレにある「ヴィータ」という保護施設に入所している女性、カタリナの人生を手がかりに、生とは何かを描いたエスノグラフィである。二〇〇五年に刊行された原書は大きな反響を呼び、優れた人類学研究に授与されるマーガレット・ミード賞はじめ七つの賞を受賞している。その後二〇一三年に出された新版に本書は基づいている。

一九九五年にヴィータで働きはじめた著者は、二年後にカタリナという三〇代前半の女性と出会う。精神病とみなされていたカタリナは、夫や子ども、親族から見捨てられ、ヴィータに連れてこられた。一日中黙って下を向いて座っているだけの者、何かをぶつぶつ喋り続ける者、「元-人間」たちの中で、カタリナは手帳に言葉を綴る…　そこから著者は、ブラジルの政治制度や医療システム、人々の歴史の諸相の模索をはじめた。「社会の掃き溜め地帯」で綴りつづけることで主体を取り戻す戦いの物語であり、棄てられた者たちの生きられた経験に対する文脈と意味の復元へ挑戦した、人類学者による比類のない書である。写真多数。［医療人類学・人権問題］【三月下旬刊】（四六判・696頁・五〇〇〇円）

月刊雑誌《みすず》最近号より

［2018年読書アンケート特集］佐藤文隆／永田洋／小沢節子／鈴木裕子／加藤典洋／岡田秀則／桑野隆／平尾隆弘／根本彰／杉山光信／川端康雄／川那部浩哉／永江朗／竹内洋／山内昌之／生井英考／小西正捷／飯田隆／柿沼敏江ほか（一・二月合併号）。山本義隆「カッシーラーと二〇世紀科学史学」／藤山直樹「繁栄、変わること、そして生き延びること」／小野寺拓也「日記から見えてくるナチ社会」ほか（三月号）。（各三〇〇円）

■**『みすず』購読のご案内**　小誌は、原則として郵送による年間購読をお願いしています（年11回発行、一年間の購読料三七八〇円、税・送料込）。「**読書アンケート**」**特集号**のみご希望の方は、**切手四一〇円分**（送料込）を直接、みすず書房営業部「みすず」係（〒113―0033　文京区本郷2―20―7）までお送り下さい。また、バックナンバーは在庫をお問い合わせ下さい。

受賞図書のご案内

◆**第70回読売文学賞〈随筆・紀行賞〉**

西成彦　外地巡礼　「越境的」日本語文学論　4200円

選評「この著者には、ポスト植民地主義批評の到達点に立つ独創的な思想家としての風貌が備わっている」（沼野充義）

◆**第36回櫻田会奨励賞**

明田川融　日米地位協定　その歴史と現在（いま）　3600円

「我が国政治の発展に資する」政治研究業績に対して授与される同賞受賞。「不平等協定」について、第一に読むべき書。

◆［創設90年］**2018年度朝日賞**

木庭顕

授賞理由「政治・デモクラシー・法の歴史的基盤の探究」

特に『憲法9条へのカタバシス』（みすず書房）『誰のために法は生まれた』（朝日出版社）の2著が高く評価されての受賞です。

憲法9条へのカタバシス　4600円

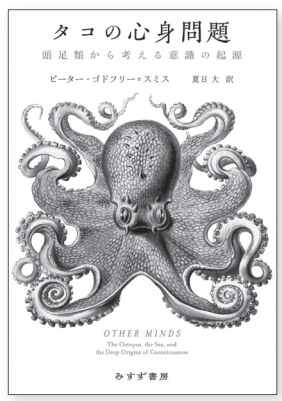
新版　現代日本法へのカタバシス　7800円

大好評7刷

ピーター・ゴドフリー＝スミス　夏目大訳

タコの心身問題

頭足類から考える意識の起源　3000円



◆書評を賜りました

首藤淳哉（ラジオ番組プロデューサー）「生命の奥深さを再認識できる一冊」『AXIS』www.axismag.jp/ 12月11日

冬木糸一「異なる道筋で進化した「心」を分析する」『HONZ』honz.jp/ 12月16日

伊藤亜紗（東京工業大学准教授・美学者）「驚くべきその別世界」『読売新聞』12月16日

吉川浩満（文筆家）「知性生んだ自然淘汰の妙技」『日本経済新聞』1月12日

野矢茂樹（立正大学教授・哲学）「全身が脳　対極の人間を照射する」『朝日新聞』1月19日

岡本拓司（東京大学教授）「人間と別系統の「心」を考える」『信濃毎日新聞』1月27日

布施英利（美術批評家）「心とは何か、知性とは何か　タコを鏡にして、ヒトの心や知性にまで迫る」『週刊読書人』2月8日（第3276号）

最相葉月（ノンフィクションライター）「心の複雑さ　海中に探る」『北海道新聞』2月17日

風野春樹「タコの気持ちを考える本」『本の雑誌』2019年3月号「サイコドクターの日曜日」　ほか

〒113-0033 東京都文京区本郷2-20-7
tel. 03-3814-0131 fax 03-3818-6435
みすず書房
www.msz.co.jp　ニュースレター（月2回配信中）　ウェブサイトよりお申し込みください
ツイッター www.twitter.com/misuzu_shobo　インスタグラム www.instagram.com/misuzu_shobo/（価格は税別です）

原子力災害後の人と土地の回復とは

安東量子
《海を撃つ
広島・福島・ベラルーシにて》

一九七六年生まれの著者は、植木屋を営む夫と独立開業の地を求めて福島県いわき市の山間部に移り住む。震災と原発事故直後、分断と喪失の中で、現状把握と回復を模索する。そして、放射線の勉強会や放射線量の測定を続けるうちに、国際放射線防護委員会ICRPの声明に出会う。

著者はこう思う。「自分でも驚くくらいに感情を動かされた。そして、初めて気づいた。これが、私がいちばん欲しいと願っていた言葉なんだ、と。『我々の思いは、彼らと共にある』という簡潔な文言は、我々はあなたたちの存在を忘れていない、と明確に伝えているように思えた。」

以後、地元の有志と活動を始め、SNSやメディア、国内外の場で発信し、対話集会の運営に参画してきた。「原子力災害後の人と土地の回復とは何か」を摑むために。「私は忘れまい。私は記憶に、記録にとどめよう。」一女性の幻視的な眼差しが捉えた、福島第一原発事故後の平坦な戦場。［原発問題・エッセイ］（四六判・296頁・二七〇〇円）

▽**西澤丞『福島第一　廃炉の記録』**（写真集、三二〇〇円）

山本義隆『福島の原発事故をめぐって』（一〇〇〇円）

五十嵐太郎『被災地を歩きながら考えたこと』（二四〇〇円）

生誕120年　復刻と多角的検証

伊藤佳之他《超現実主義の1937年
福沢一郎『シュールレアリズム』を読みなおす》

二十世紀初頭のパリで産声を上げたシュルレアリスムを日本にいち早く導入した洋画家・福沢一郎（一八九八―一九九二）が、前衛絵画の未来に期待したものとは――。同時代の前衛芸術の展開やその思想的背景を、精鋭の研究者が多角的に検証した論集。

第一部では福沢が一九三七年に著した『シュールレアリズム』を復刻再現し、第二部では各章の解題を担当執筆した。ここに日本近代美術史研究の新たな扉が開かれる。

執筆者は伊藤佳之（福沢一郎記念館）・大谷省吾（東京国立近代美術館）・小林宏道（多摩美術大学美術館）・春原史寛（武蔵野美術大学）・谷口英理（国立新美術館）・弘中智子（板橋区立美術館）。（A5判・432頁・六八〇〇円）

［生誕一二〇年記念］**「福沢一郎　このどうしようもない世界を笑いとばせ」**展　開催中

東京国立近代美術館（竹橋）で五月二十六日まで

全体像に第一人者が迫る――古賀敬太《カール・シュミットとその時代》

カール・シュミット（一八八八―一九八五）とは何者か。政治思想家なのか法学者なのか。ナチス・ドイツの御用学者なのか、それとも状況に反応するカメレオン的人物なのか。『政治的なものの概念』『政治的ロマン主義』『憲法論』『現代議会主義における精神史的地位』など多くのロングセラーをもち、デリダやアガンベンはじめ数々の論者が言及するシュミットの全体像を、その作品読解を軸に、同時代の詳細や日記・書簡などを通して、第一人者が描く。国家と憲法の関係や「非常事態＝例外状態」など本書の中心テーマは、日本の今後を考えるためにも役立つだろう。［政治思想・法学］【四月上旬刊】（A5判416頁・予六八〇〇円）

もうひとつの主著に新解説

ヴィクトール・E・フランクル《死と愛　新版
霜山徳爾訳　河原理子解説　ロゴセラピー入門》

フランクルの『夜と霧』と並ぶもうひとつの主著『死と愛』（原題：医師による魂の癒し）をリニューアル。装丁、文字組を新たに、読みやすい活字でおくる新版。人生の「意味」による癒しと回復を説いた、教師、医師にとっての必読書。河原理子氏による新解説つき。［心理学・精神医学・哲学］【四月中旬刊】（四六判296頁・予二七〇〇円）

「遅発性心的外傷患者への絵画療法の試み」など28編

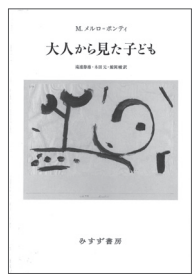
中井久夫集10　最相葉月解説《認知症に手さぐりで接近する 2007-2009》

「一般の人と医師団との間にある、一種のずれ、すれ違い、違和性、どこか相合わないもの――この違いはかなり深い」（『臨床瑣談　続』まえがき）。家族や知人の身におこった認知症やガン等の病に、患者と主治医のあいだという立場から関わり、生存だけでなくQOL（生活の質）にも配慮した治療のあり方を考えた「ガンを持つ友人知人への私的助言」「SSM、通称丸山ワクチンについての私見」「昏睡からのサルヴェージ作業の試み」ほか、「敗戦直後の山岳部北アルプス行き」「河合隼雄先生の対談集に寄せて」「臨床引退後の日々」等を収録。［精神医学・エッセイ］【四月上旬刊】（四六判344頁・予三六〇〇円）

▽**中井久夫集**［全11巻既刊10］

哲学者の児童心理学・教育講義

M・メルロ＝ポンティ　滝浦・木田・鯨岡訳《大人から見た子ども》



〈自己の身体の意識と、他人知覚とのあいだには、対応関係があります。自分が身体をもっているということを意識することと、他人の身体が自分のとは別の心理作用によって生気づけられていると意識することとは…現実に一つの系をなしている操作なのです〉。著者がソルボンヌ大学の児童心理学・教育学講座で行なった「心理学的に見た幼児の言語の発達」「幼児の対人関係」はじめ一連の講義の要録など4編。［哲学・心理］（四六判・304頁・三八〇〇円）

支援にかかわる人必携

田宮聡《ケースで学ぶ 自閉症スペクトラム障害と性ガイダンス》

性の問題はだれにとっても大切なのに、口にすることがはばかられる問題だ。

自閉症スペクトラム障害をもつ人の場合、その障害特性のために、性をめぐる言動をちがう意味合いに受けとってしまい、そのために困難に直面することがある。

本書は児童精神科医として自閉症児・者の支援にたずさわってきた著者が、120のケースから見えてくる支援の心がまえ・コツを解説する。

性の知識はいったいいつ、どうやって身につければいいのだろう？　問題行動が起こるまえに、まわりの大人にできることは？　障害児支援にかかわる医療従事者・教育関係者・ソーシャルワーカー必携の、性の案内書！

［発達障害・障害児支援］（A5判・216頁・二七〇〇円）

みすず書房営業部だより

写真集『**福島第一　廃炉の記録**』を弊社より出版された**西澤丞**さんの写真パネル展が、各地の図書館で開催されています。江戸川区立西葛西、文京区立目白台、海老名市立有馬、矢板市立、日高市立で三月下旬まで。また能代市立（四月開催予定）など、お近くの皆様、ぜひ足をお運びいただけましたら幸いです。

NHKスペシャル「大往生～わが家で迎える最期～」に登場された医師・**小堀鷗一郎先生**の著作『**死を生きた人びと**』の重版が十三刷となりました。ぜひご一読ください。

新装復刊

2月

現象としての人間

テイヤール・ド・シャルダン　科学者であるイエズス会司祭が、人類と神の存在をさぐる。**美田稔訳 ¥4400**

3月

風見章日記・関係資料 1936–1947

近衛文麿内閣で対中国政策の渦中にあった政治家・ジャーナリストの重要資料。**北河・望月・鬼嶋編 ¥15000**

4月

存在から発展へ

物理科学における時間と多様性

プリゴジン　可逆的な力学的世界観から不可逆的な熱学的世界観へ。その哲学的意義。**小出・安孫子訳 ¥6600**

X線からクォークまで

20世紀の物理学者たち

セグレ　素粒子物理学者が描く列伝。レントゲン、ボーア、アインシュタイン、フェルミ… **久保・矢崎訳 ¥7800**

水の構造と物性

カウズマン他　水分子の構造から、水蒸気、氷、水の熱力学的、電気的、光学的物性まで。**関・松尾訳 ¥7200**

みすず書房 近刊のお知らせ

5-7月の刊行予定から（書名は仮です）

「二つの文化」論争
　ガイ・オルトラーノ　増田珠子訳
宗教科学事典
　アズリア／エルヴュ＝レジェ　鶴岡賀雄他訳
回想のケンブリッジ　半澤孝麿
科学者は、なぜ軍事研究に手を染めてはいけないか？　池内了
極大から極小へ
　ケイレブ・シャーフ　佐藤やえ訳
政治的イコノグラフィについて
　カルロ・ギンズブルグ　上村忠男訳
キノコのなぐさめ
　ロン・リット・ウーン　枇谷玲子訳
フロイディアン・ステップ　十川幸司
明治維新の敗者たち
　マイケル・ワート　野口良平訳
ナチス経済の盛衰　アダム・トゥーズ　山形浩生訳

（www.msz.co.jp/book/new/ にもご案内）

みすず書房・最近の重版より

生きがいについて《神谷美恵子コレクション》
　神谷美恵子　¥1600
死を生きた人びと――訪問診療医と355人の患者
　小堀鷗一郎　¥2400
孤独な群衆　上《始まりの本》
　D. リースマン　加藤秀俊訳　¥3600
スピノザの方法
　國分功一郎　¥5400
ライフ・プロジェクト
　H. ピアソン　大田直子訳　¥4600
善意で貧困はなくせるのか？――貧乏人の行動経済学
　D. カーラン／J. アペル　清川訳　澤田解説　¥3300
中国はここにある――貧しき人々のむれ
　梁鴻　鈴木将久他訳　¥3600
農家が消える――自然資源経済論からの提言
　寺西俊一・石田信隆・山下英俊編著　¥3500
ウイルスの意味論――生命の定義を超えた存在
　山内一也　¥2800
記憶を和解のために
　E. ホフマン　早川敦子訳　¥4500